



巻頭言

## ヒューマンネットワーク構築の勧め

●  
中村 洋 Hiroshi NAKAMURA

分析士会 会長, LC 研究懇談会 委員長, 日本分析化学会 元会長, 東京理科大学名誉教授



2019年、人類は突然新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の猛威にさらされ、スペイン風邪（1918～1921年）以来の世界規模の被害を被った。コロナ禍は社会活動全般にパラダイムシフトを引き起こしたが、人間の生き方や在り方についても改めて考える契機となった。多くの人間活動がウェブに依存せざるを得ない状況を強いられ、皮肉にもオンライン会議の便利さを知ることとなったが、人間関係ではどこか空虚さが残った。徐々に対面で行事が行われる状況に回復した現在、改めて face-to-face の大事さを実感している人が多い。デジタル化時代への懸念は、極論すると人間性の喪失に対する不安である。我々ホモサピエンスは、最も近縁の類人猿と同じく、安全・安心を得るために本来集団生活する習性の動物である。そうだとすると、「人間」は文字どおり人間に囲まれて生活・生存しているのが普通であり、その状態で心の平穏を保つことができるからである。

筆者は1974年から2年間、米国 National Institutes of Health に留学し、ゴードン会議に1週間参加した。この経験を参考に、1泊2日のLC-DAYs 研修会を開始し（2001年）、以来、ことあるごとに若手には研修にもまして仲間作りを奨励している。一方、学会では2000年頃から、ヒューマンネットワーク構築の重要性を特に若い方々に説き続けてきた。すなわち、自分の専門領域の集まりにはできるだけ参加し、顔見知りや友人を作るように奨励した。その際、年配者には敬意をもって接し、自分が知らないことを質問すると、ほとんどの方が嬉しそうに細かく教えてくれることを付け足した。一方、年配者には若者と積極的に会話することにより、若者言葉やライフスタイルの吸収を勧めた。これにより、老若双方とも互いに情報が得られ、自然にネットワークの構築が果たせるからである。専門領域の仲間を作るにはエネルギーが要る。自分に魅力がないと仲間はできにくい。他人が自分のどんな点に魅力を感じるかは様々であろうが、コミュニティーでは新しい情報や高度な専門性を持っていることが情報発信力と見なされる。自分が周囲の人たちにとって真に魅力的であるためには、人柄の良さに加えて、自己研鑽の成果としての信頼性、説得力、蘊蓄<sup>うん</sup>が必要であろう。さらに、自己研鑽の過程では切磋琢磨する友の存在が不可欠である。『朱に交われば赤くなる』の言い習わしどおり、優れた人物の影響は自己向上に大きく役立つ。若い方々は、自分が志す領域の優れた先輩に積極的に接する機会を持ち、教えを乞う姿勢を持って貰いたいものである。

さて、デジタル化と資格社会への移行の真ただ中にある現在、徒手空拳では社会へのアピール力に欠ける。そこで、日本分析化学会では守破離の精神に基づく個人の努力を公的制度で支援する仕組みとして、2010年に分析士認証制度を創設した。産業界の底上げにより日本の科学レベル向上に資するためであり、現在では3000名を超える分析士を擁するまでに成長し、個人の分析スキルと知識に関する社会的評価基準として利用されている。

© 2024 The Chemical Society of Japan